

牛乳及乳製品取締要綱 牛乳及乳製品ノ生産販賣ニ關スル取締ハ明治三十三年(一九〇〇年)内務省令第十五號牛乳營業取締規則ニ據リテ施行セラレ各地方廳ハ之ニ基キテ夫々當該地方ニ適應スヘキ施行細則ヲ規定シ以テ衛生技術員及警察官之カ取締ノ實務ニ從事ス。

今牛乳營業取締規則ノ内容ヲ略述スレハ販賣ノ用ニ供スル牛乳(全乳及脫脂乳)及乳製品(煉乳、脫脂煉乳及粉乳)中其ノ品質上ノ要件トシテ脂肪量ハ全乳三、〇%以上(ケルベル氏検査法ニ據ル)煉乳八、〇%以上トシ比重ハ全乳一、〇二八乃至一、〇三四脫脂乳一、〇三二乃至一、〇三八トナス其ノ他牛乳ニシテ腐敗又ハ他物ヲ混合シタルモノ或ハ種々ノ乳弊ヲ呈セルモノ並急性及慢性傳染病ニ罹レル牛、劇毒藥服用中ノ牛、分娩後七日以内ノ牛ヨリ搾取シタルモノ及ヒ乳製品ニシテ腐敗又ハ他物ノ混合シタルモノ所定ノ脂肪量及糖量(糖量ハ蔗糖、乳糖ヲ合セテ五五%以下トス)標準ニ適合セザルモノ並牛乳又ハ乳製品ニシテ衛生上危害ノ虞アル容器ヲ使用シタルモノハ販賣シ又ハ販賣ノ目的ヲ以テ陳列貯藏スルコトヲ得ス其ノ他牛乳又ハ乳製品ノ容器ニハ各其ノ種類ニ應シ其ノ全乳、脫脂乳、煉乳又脫脂煉乳タルコトヲ明記セシムルコトヲ規定セリ。

又牛乳營業者ニ關スル規定トシテハ牛乳又ハ乳製品ノ搾取製造販賣、請賣ヲ營業トナス者ヲ以テ牛乳營業者ト稱シ其ノ中牛乳ノ搾取又ハ乳製品ノ製造營業ヲ爲サムトスル者ハ地方長官ヲ認可ヲ受クルコトヲ要スト規定ス而シテ衛生上危害ノ虞アル乳汁ヲ分泌スル牛ヨリ搾乳スルコト及ヒ一定ノ牛乳ヲ乳製品ノ原料トシテ使用スルコトヲ禁止シ且ツ結核、癩、梅毒其ノ他ノ傳染性疾患ニ罹レル者ハ牛乳又ハ乳製品ノ取扱ニ從事スルヲ得ス。

ルヲ得ス。

前述ノ各規定ニ違反シタルモノハ夫々處罰セラレ尙ホ乳牛ノ牛舎及ヒ牛乳搾取若ハ乳製品製造ニ用ラル場所ノ構造設備及管理方法ニ關シテハ地方長官ニ於テ之ヲ定ム。

今各地方廳ノ規定スル要項中共通ノ點ヲ舉クレハ牛乳搾取所ニハ牛舎、運動場、牛乳取扱所、尿溜、屎溜、隔離室等ヲ設ケシメ更ニ其ノ面積構造設備等ニ付夫々衛生上細密ナル制限ヲ加ヘ乳製品製造所ニハ製造室、原料品室、製品室等ヲ區別セシメ共ニ牛乳ノ搾取乳製品ノ製造ニ際シ其ノ衛生上遺憾ナキヲ期セリ而シテ乳牛ノ管理牛舎ノ清潔牛乳ノ搾取及取扱乳製品製造所ノ管理ニ關シテハ夫々衛生上必要ナル事項ヲ規定シ之ニ違反シタル者ハ處罰セラル。

山羊乳ノ取締ニ關シテハ地方長官ニ於テ右牛乳營業取締規則ノ内容ヲ準用シ居レリ。

乳牛及乳牛ノ検査並其ノ成績搾乳用ニ供セムトスル牛ハ健康検査ヲ受クルヲ要シ爾後乳牛ハ隨時牛舎ニ就キ検査セラル而シテ牛乳ノ検査ハ之ヲ途上検査及牛舎別検査ニ區別シ毎月一回以上數回其ノ反應色澤稠度臭味比重脂肪含有量容量ノ多少混和物ノ有無不正乳加熱又ハ腐敗ノ有無等ヲ検査ス而シテ途上検査ハ一般ニ警察官ニ於テ簡單ニ之ヲ行ヒ牛舎別検査ハ衛生技術員ニ於テ精密ニ之ヲ行フ。

大正十二年ニ於ケル乳及乳製品類ノ検査成績ヲ示セハ左ノ如シ。

種類	試験件数		規則不適品		規則不適品處分別件数		營業ニ對スル處分
	總數	規則不適品	廢棄シタルモノ	衛生上危害ナキ方法ニヨリ措置シタルモノ	處分ヲ爲シ得サリシモノ	禁止	
牛乳	七六六八四	一一二六七	一一七七	三九三	七〇六	—	—
山羊乳	九二二	二二	一一	九	一	—	—
乳製品	一二四一七	一四八	一〇五	三四	九	—	—

牛乳ト結核、牛乳ノ衛生警察ニ關シ更ニ特記ス可キハ畜牛結核病豫防法ナリトス同法ハ農林大臣ノ主管スルトコロニシテ明治三十六年(一九〇三年)ノ制定施行ニ係リ乳用牛、外國種牛及雜種、種牡牛ノ結核病ノ有無又ハ輕重ヲ定ム而シテ検査ハ行政官廳ニ於テ「ツベルクリン」注射ノ方法ト臨床的検査方法トニ依リ期日及場所ヲ指定シ通常一箇年毎ニ之レヲ行ヒ「ツベルクリン」ノ應用ニ依リ反應ヲ呈シ且ツ検査上乳房結核、重症肺結核、汎發結核又ハ著シク榮養ヲ損害セル結核諸症ニ該當スルモノハ之ヲ重症結核病ト爲シテ之レヨリ牛乳ヲ搾取セシメサルハ勿論病牛ハ之ヲ撲殺シ皮角蹄ヲ除クノ外ハ悉ク之ヲ燒棄又ハ埋却シ輕症及疑症結核病牛ハ之ヲ隔離セシメ其ノ乳汁ハ攝氏八十度以上ニ加熱殺菌ス可キコトヲ告示セリ。

明治四十年(一九〇七年)ヨリ大正十二年(一九二三年)ニ至ル畜牛結核病検査成績ヲ示セハ左ノ如シ。
畜牛結核病検査成績累年比較表

年次	検査牛數	検査				成績			
		健康牛	百分比	疑症牛	百分比	輕症牛	百分比	重症牛	百分比
自明治四十年至大正五年平均	四二〇九一頭	四〇五三七	九八・三六	一一二九	〇・五二	四四五〇	一・〇八	一四五〇	〇・四
自大正五年至同五年平均	二五一九二	二四七八五	九八・三八	一〇二六	〇・四一	二九五四	一・一七	九四〇	〇・四
大正六年	一一九一四	一一六八四	九八・〇七	五九二	〇・五〇	一六八一	一・四一	三〇〇	〇・三
大正七年	一一四五六	一一二六五	九八・五〇	五九八	〇・四八	一一五七	一・〇一	一九〇	〇・二
同八年	一一三八一	一一二〇〇	九八・七〇	五九四	〇・四二	一〇八九	〇・八八	一〇〇	〇・一
同九年	一一〇二二	一一八八三	九八・九二	五〇〇	〇・四二	七八三	〇・六五	一六〇	〇・一
同十年	一一七五五	一一六三六	九九・〇二	四〇〇	〇・三四	七〇七	〇・六〇	四六〇	〇・四
同十一年	一一三〇八	一一九四八	九八・九九	四五二	〇・四〇	六五四	〇・五八	三三〇	〇・三
同十二年	一一八〇九	一一七二二	九九・一八	四二五	〇・三六	五二三	〇・四三	三三〇	〇・三

右表統計ノ示ストコロニ依レハ其ノ成績ハ逐年良好ナルカ如キモ之ヲ屠畜検査ノ上ニ現ハシタル成績ニ較フルニ兩者ノ間著シキ差異アルハ甚タ遺憾トスルトコロニシテ牛乳ノ公衆衛生上忽諸ニ附ス可カラサルヲ以テ今左ニ大正十、十一及十二ノ三ケ年間一道三府三十八縣下ニ於ケル乳用牛ノ屠殺後検査ノ成績中乳房結核病牛數ヲ掲ケテ識者ノ參考ニ資ス。

畜牛結核病預防法 ニ據ル検査ノ成績	屠殺總數(牝)		乳房ニ結核變狀ヲ見タルモノ			
	大正十年	同上百分率	大正十一年	同上百分率	大正十二年	同上百分率
輕症	一、一三二	二二	五・三〇	二二	六・四〇	二〇
疑症	六二八	一五	六四〇	二二	六・八〇	五
健康(甲)	一〇、九九六	一四	〇・三八	一九	〇・五一	二二
健康(乙)	一八、五〇八	四三	〇・七〇	一四	〇・三六	二四
						〇・六一

備考 健康欄ニ於テ「甲」ハ臨床的診察ニ依ルモノ、「乙」ハ臨床的診察及「ツベルクリン」應用ニ依ルモノトス

乳及乳製品ニ關スル統計 大正十二年中ニ於ケル調査成績ヲ示セハ左ノ如シ。

牛乳ニ就テハ

牛乳搾取場數

五、四〇六ヶ所

飼養乳牛數

四六、九三七頭

搾取牛乳量

七〇、一一一、五七〇立

牛乳販賣業者數

八、五八四人

山羊乳ニ就テハ

山羊飼育者數

一六三八

山羊頭數

一、九〇四頭

搾取乳量

三二一、七一九立

乳製品ニ就テハ

乳製品製造販賣業者數

五九人

煉乳製造高

八、七〇六、二四七珎

脫脂煉乳製造高

二〇四、八三六珎

粉乳製造高

二二七、六九五珎

食肉ノ取締

内務技師 池田 錫

肉食ノ沿革

本邦ニ於ケル肉食ノ起源ハ他ノ民族ニ於ケルト同シク經濟發達ノ第一階梯タル狩獵及漁獵時代ニ胚胎シ
 神武天皇紀ニ既ニ牛酒ヲ以テ皇師ヲ勞ヒタル記事アリ爾來累次進展ヲ辿リタルモ凡ソ千四百年前佛教傳來シ
 テヨリ約二百年間ハ其ノ殺生戒ニ基キ肉食禁制ノ勅詔屢々下リ之カ消費ノ自然的發達ヲ阻害シタリ爾後肉食
 ノ衰微ハ久シキ因襲トナリタルモ幕末諸外國ト通商スルニ及ヒ所謂神戸牛ノ肉味佳良ニシテ外國人間ニ賞美
 セラレシ以來牛ノ屠殺ハ内外人ノ需用ニヨリ顯著ナル増加ヲ來セリ。

越ヘテ明治時代ニ及ヒ文化ノ發達ト共ニ牛、羊、豚及馬ノ屠殺漸次廣ク行ハレ更ニ近時食肉ノ需用頓ニ激
 増シ都市ニ於テハ著シク之カ消費普及ヲ觀ルニ至レリ。

然レトモ本邦ニ於ケル獸肉消費ノ一般普及ハ未タ歐米諸國ノソレニ及ハス之ハ一面獸肉ニ代フルニ魚介肉
 ノ消費古來比較的一般ニ普及シタル爲ナルヘク益々其ノ多量消費ヲ實現シツ、アルハ本邦特有ノ事情ナリト

謂フヘシ蓋シ本邦ハ氣候温和ナル關係上比較的脂肪ノ少キ魚介ヲ撰フコトト四圍海ナルヲ以テ新鮮魚介ノ供給容易ナルコトニ基因スヘク日常副食物ハ主トシテ之ヲ攝取スル狀況ニ在リ政府亦之ヲ漁獲及消費ヲ圓滑ナラシムル爲水産冷蔵庫ニ特ニ補助金ヲ交付シ現ニ水産物専門ノ冷蔵庫四一箇所其ノ總容積二五八六五立方メートル有ス。

食肉取締ノ沿革

食肉ノ衛生的取締ハ明治初年屠場取締並斃禽獸取締法規發布セラレタルヲ以テ嚆矢トス然レトモ前者ニアリテハ屠場位置ノ制限及病牛死牛ノ賣買ヲ禁スルヲ主トシ後者ニアリテハ傳染病死禽獸ノ燒棄及老死禽獸並普通病ニ因ル斃禽獸ノ食用嚴禁ヲナスニ止リ其ノ他詳細ノ規定ヲ缺キ且是等ノ取締ハ爾後地方長官ノ便宜制定ニ一任シタルヲ以テ全國各地ニ於ケル取締ハ自ラ區々タルモノアリキ。

現行食肉取締

中央法制トシテ屠畜ニ付テハ屠場法ノ制定アリ賣肉ニ付テハ警察犯處罰令ニ腐敗シタル肉類ヲ營利ノ目的ニ供スルヲ禁スル規定アリ而シテ更ニ地方法制トシテ賣肉取締並斃禽獸取締ノ單行法規アリテ茲ニ食肉ノ取締ハ漸ク整備スルニ至レリ。

以下屠場、屠畜検査及賣肉取締ニ關スル事項ヲ分説スヘシ。

屠 場

本邦屠場法ハ明治三十九年(一九〇六年)法律第三十二號ヲ以テ發布セラレ同法施行規則、屠場ノ設備構造標準及是等ニ基ク地方取締細則ニヨリ施行セラル。

一 屠場ノ設立

屠場ノ設立ハ公設ヲ原則トス即(1)市町村ニ於テ屠場ヲ設立スルトキハ地方長官ハ必要ト認ムル地區内ニ於ケル私立屠場ノ廢止ヲ命シ(2)内務大臣ハ必要ト認ムルトキハ屠場ノ設立ヲ市町村ニ命ス(3)市町村ハ地方長官ノ認可ヲ得ルニ非サレハ屠場ヲ廢止スルコトヲ得ス(4)市町村屠場ノ用地ニ必要ナル國有ノ土地ハ之ヲ市町村ニ讓與シ又ハ無償ニテ使用セシメ(5)私人ニ屠場ノ設立ヲ許可スルトキハ一定ノ期限ヲ附スルコトヲ要ス。

本法施行以前ハ千數百ノ不完全ナル屠場ヲ有シタルモ漸次整理セラレテ目下屠場總數五五七内公設三二九私設二二八ヲ算ス。

屠場ノ位置ハ屠畜及屠肉ノ搬出入及給水並排水ニ便ニシテ離宮、御用邸、御陵墓、社寺、學校、病院、公園及水道水源ヨリ離隔スルヲ要シ屠場ニハ繋留所、生體検査所、屠室(牛馬屠室 猪羊屠室 豚馬屠室 病畜屠室)、検査室、血液溜、汚

水溜、汚物溜、消毒所及隔離所ノ設置ヲ要ス。

二 屠 場 制 度

屠場法ノ構成ハ屠場強制主義ニシテ屠場以外ニ於テハ食用ニ供スル目的ヲ以テ獸畜ヲ屠殺解體スルコトヲ得ス但シ例外トシテ自家用屠殺、切迫屠殺(解體ハ屠場内ニ於テスルヲ要ス)、船内屠殺、及土地ノ狀況ニ依リ地方長官ノ認許シタル場合ノ屠場外屠殺解體ヲ認ム而シテ屠場法ノ定ムル獸畜ノ種類ハ牛、羊、豚及馬ナリ。

屠 畜 檢 査

屠畜取締ハ廳府縣衛生職員制ニヨル五百有餘名ノ專任衛生技術員ト警察官トヲ以テシ之カ檢査ニ關シテハ屠畜檢査心得ニ詳細ニ規定セラル次ニ其ノ概要ヲ生體檢査及屠殺後檢査ニ分チテ述フヘシ。

一 生 體 檢 査

望診及觸診ヲ主トシ若シ異狀ヲ認ムルトキハ更ニ精密ナル診斷法ヲ行フ生體檢査ニ於テ獸畜カ癩病ニ罹リ食用不適ト認メタルモノハ屠殺ヲ禁シ角又ハ前蹄若ハ臀部ニ禁字ヲ烙印ス其ノ傳染病ナル場合ハ直ニ隔離セ

シメ病毒ニ汚染シタル場所物件ニ對シ一定ノ消毒法及清潔法ヲ施行ス。

病畜ハ生體檢査ニ於テ食用ニ供スルモ衛生上危害ノ虞ナシト認メタルモノト雖病畜屠室以外ニ於テ屠殺スルヲ禁ス。

二 屠 殺 後 檢 査

屠殺後檢査ハ血液各臟器及其ノ淋巴腺等各部位ノ檢査ヲ行ヒ特ニ疾病ノ好發部位ニ對シテハ精檢シ最後ニ屠肉ニ及フ。

獸體ノ全部食用不適トナスモノハ家畜傳染病(牛痘、炭疽、氣腫疽、鼻疽、假性皮炎、牛ノ傳染性肋膜肺炎、流行性鷄口瘡、狂犬病、羊痘、豚虎列刺、豚疫、豚丹毒、牛ノ傳染性流產、馬緬羊山羊ノ疥癬及加奈陀馬痘)膿毒症、敗血症、尿毒症、強直症、高度ノ黃疽、高度ノ水腫、腫瘍(筋骨、淋巴腺ニ多發セルモノ)旋毛蟲病、中毒諸症(人體ニ有害ノ虞アルモノ)ニシテ獸體ノ局部食用不適トナスモノハ化膿性又ハ壞疽性皮膚炎アル部分、結締織筋腱臟器ノ炎症アル部分、炎性產物ニヨリ汚染シタル部分、腫瘍ノ部分、石灰變性ノ部分、放線菌腫、葡萄微腫ノ部分、疾病ノ爲筋肉又ハ臟器ノ萎縮セル部分、寄生蟲及寄生蟲ヲ分離シ能ハサル部分ナリ右ノ他結核病畜ノ肉ノ處分法ニ關シテハ病的變狀一臟器及其淋巴腺ニ限局セルカ又ハ結核病ノ病的變狀二三ノ臟器又淋巴腺ニ發生セルモ各部ノ變狀ニ限局シ急性結核ノ變狀ヲ呈セサルトキハ所有者又ハ管

理者ニ於テ當該検査員ノ指揮ニ從ヒ患部及之ニ近接セル組織ヲ切除シ之カ燒棄又ハ消毒ノ上埋却セシメ他ハ食用ニ供スルコトヲ認ム。

右ノ場合ニ於テ二個以上ノ臟器及淋巴腺ニ於ケル結核病的變狀蔓延セルトキ又ハ急性結核ノ變狀ヲ呈スルトキハ重症結核病トシテ全然食用ノ目的ヨリ排除スルヲ要ス。

検査ヲ終リタルトキハ食用ニ供スル部分ニ逐一檢印ヲ押捺シ食用不適トシテ廢棄ヲ命シタルモノハ之ヲ細斷シテ煮沸、消毒其他衛生上危害ナキ方法ニヨリ處分ス。

更ニ特筆スヘキハ支那、西伯利亞ヨリ輸入スル食用牛ニ關スル事項ナリ之ニ對シテハ牛疫ノ侵入ヲ完全ニ防遏セムカ爲検査終了後直ニ検査所ニ隣接スル屠場ニ於テ之ヲ屠殺セシメ牛ノ接觸シタル場所物件並内臟血液、皮、骨、角、蹄等ニ付夫々嚴重ナル消毒法ヲ行ヒタル上此等ノ利用ヲ認ム。

検査上主トシテ發見セラル、疾病ハ普通病ニシテ傳染病ハ少シ殊ニ結核病ハ日本在來ノ畜牛ニハ稀有ニシテ罹病牛ハ殆ト全部外國種若ハ其ノ雜種ニ屬スル乳用牛ナリ。

大正八年ヨリ同十二年迄五箇年間平均屠殺頭數及其ノ成績ヲ示セハ左ノ如シ。

獸種	屠殺頭數	屠殺禁止頭數	屠殺後検査		
			筋肉全部廢棄頭數	同一部廢棄頭數	内臟ノミ廢棄頭數
牛	二七三、九七三、二	一二七、八	一三六、〇	五、〇一六、四	五六、五九四、〇

種	屠殺頭數	屠殺禁止頭數	屠殺後検査		
			筋肉全部廢棄頭數	同一部廢棄頭數	内臟ノミ廢棄頭數
猪	二〇、三九六、二	一〇、四	九、〇	一二四、四	八八六、二
羊(山羊)	二、二九〇、〇		〇、二	五、六	一〇五、二
豚	三七六、九〇八、二	一二三、八	一〇一、〇	三、三六九、二	一三四、五三、〇
馬	六八、四九七、二	二二八、〇	五六、二	二、六五三、六	八、五七一、〇

備考 本表屠殺頭數ニハ自家用屠殺及切迫屠殺ヲ含ミ屠殺後検査ニハ切迫屠殺ノ分ヲ含ム

賣肉取締

賣肉ニ付テハ目下全國統一の取締規則ヲ缺クモ地方取締ノ要目ヲ略述スレハ取締ヲナスモノハ屠場法ニ於テ限定セル獸種ノ肉ノミナラス一般野生鳥獸肉ニ及ヒ而シテ多クハ生肉ニ限ルモ 方ノ必要ヨリ肉製品ノ取締ヲ施ハス獸肉營業者並行商配達者ハ所屬警察官署ニ届出ヲ要シ後者ハ一定ノ鑑札ヲ携帯セシメ尙斃獸取扱營業者及同居ノ家族ハ屠畜業並獸肉營業ヲ兼スルコトヲ得ス。

獸肉ノ店舗ハ肉ノ混賣ヲ防ク爲少クモ牛肉ト馬肉トハ同一店舗ニ於テ營業スルコトヲ禁スルコト多シ。牛、羊、豚及馬ノ肉ハ屠畜檢印アルヲ要シ輸入肉ニ付テハ一部地方ニ於テ販賣前検査ヲ施行スルモノアルモ廻テ輸入港ニ於テ統一の取締ノ必要アリ目下立案審議中ナリ。

獸肉ノ置場ハ防塵防蠅ノ設備ヲ要求シ其ノ他運搬容器俎等ノ清潔保持ヲ命シ獸肉ノ取扱ニハ一定ノ疾病

(結、癩、梅毒其ノ他傳染性疾患)ニ罹レル者 從業ヲ禁止ス。
 腐敗又ハ獸種ヲ詐稱シテ販賣シタル者ハ科料拘留ニ處セラル。
 本則ノ執行ニ關シテハ隨時店舗ニ就テ検査ヲ施行ス其ノ大正十二年ニ於ケル成績左ノ如シ。

獸肉種類	試驗件數		食用不適品處分別件數
	總數	同上中食用不適數	
牛	八五九二	二三四	二〇九
豚	五二九七	一七一	一七〇
馬	二六四四	六四	六〇
其他	一三三三	一四	九
其ノ他			五

附表

一、屠畜數調査表

年次	牛	犛	羊(山羊ナ)	豚	馬	家禽
大正六年	二五九、三八七頭	一〇、三四三頭	一、九七三頭	二三一、三四七頭	一〇一、四〇二頭	八、四六二、三九二羽
同七年	二〇九、一〇五	一〇、一七八	一、七三九	三二五、七〇四	八七、六三三	一一、九二〇、五五一羽
同八年	一三三、六一五	一一、六一一	一、九九三	三五六、六〇八	七七、五七二	一一、二八八、八三五羽

年次	總漁獲高	肥料其ノ他ノ非食品原料	差引消費量
同九年	二四八、九五九	二、五九五	六三、四〇二
同十年	三〇五、〇六一	二、二九九	六四、九一〇
同十一年	二七四、五七九	一、九九八	六三、一四七
同十二年	三〇七、六五二	二、五六五	七三、三六二

二、魚介肉調査表

年次	總漁獲高	肥料其ノ他ノ非食品原料	差引消費量
大正七年	一、六六八、一五二、〇四四	六四八、四八四、〇五〇	一、〇一九、六六七、九九四
同八年	二、〇四八、八八五、一六〇	九五〇、七九〇、七五〇	一、〇九八、〇九四、四一〇
同九年	二、二九九、二二七、一九五	九一八、三九七、三五〇	一、三八〇、八二九、八四五
同十年	二、一四一、六九八、八一五	七九八、五九四、一六九	一、二四三、一〇四、六四六

鑛泉

内務技師 松尾仁

(一)鑛泉ニ關スル沿革 本邦ニ於ケル鑛泉ノ發見及利用ハ極メテ古代ニシテ神話ノ傳ハレルモノアルノミナラス千數百年前ニ於テ道後温泉ニハ 孝靈天皇(西曆二八九)外六帝ノ行事アリシコト有馬温泉ニハ 舒明天皇(六二九) 孝德天皇(六四五)二帝ノ行幸アリシコト史上ニ出ツ醫術ノ進歩セサリシ時代ニアリテハ殊ニ奇効アルモノト信セラレ身ニ病アルモノハ勿論健康ナル者ニアリテモ農家等農閑ノ期ヲ利用シ保養ノ爲湯治ニ赴キタルモノ多ク爲ニ所謂湯治場ナルモノノ發達ヲ見タルモノノ如シ。

(二)鑛泉ノ分布 本邦ハ他ノ太平洋沿岸諸地方ト等シク第三紀以後ニ生セル皺曲山派連互シ之レニ伴ヒテ巨多ノ火山噴出シ全國ニ亘リテ火山脈殊ニ温泉ノ多數ハ之等火山脈ニ添フテ聚落シテ湧出ス即チ千島列島ヨリ北海道ノ東部ニ涉レル千島列島火山脈系ニハ未タ著明ナル温泉無ケレ共樺太北海道ノ西部ヨリ本州ノ北部ヲ南走スル那須火山脈系中ニハ北海道ニ於テハ湯ノ川登別定山溪等本州北部ニアリテハ大鰐鳴子上ノ山青根飯坂東山那須鹽原日光草津伊香保等ノ温泉アリ東州ノ中部ヲ横斷シテ伊豆七島ニ連ル富士火山脈系ニハ赤倉、別所、諏訪、箱根、熱海、修善寺、伊東等ノ温泉アリ本州ノ中部ヨリ起リテ西部ノ北方ヲ西走ス

ル白山火山脈系中ニハ上高地、山中、山代、粟津、城崎、三朝等ノ温泉アリ四國ノ北部ヲ掠メテ西走シテ九州ノ北ヲ通過スル阿蘇火山脈系中ニハ別府温泉阿蘇栃木等アリ九州ノ中部ヨリ西南走スル霧島火山脈系中ニハ霧島及指宿等ノ温泉湧出地アリテ鑛泉湧出地ノ所屬スル市町村數實ニ六八〇ニシテ鑛泉數一、〇〇〇ヶ所ニ上ル。

(三)鑛泉ノ種類 本邦ニ於テハ未タ充分ナル調査ヲ缺クモ上述ノ如ク温泉數極メテ多ク今日迄ニ鑛泉トシテ利用セラル、モノノ數ハ成分ノ化學的分類ニ基ク温泉種別ニ就テ比較的正確ナル數字ヲ列舉スレハ

單純冷泉	一六一
單純溫泉	二三一
炭酸泉	二二三
土類炭酸泉	一八
アルカリ性炭酸泉	一五三
食鹽泉	一八七
苦味泉	七九
炭酸鐵泉	三六
硫黃泉	一四二

硫化水素泉	一一
酸性線礬泉	七
明礬綠礬泉	一一
試驗ノモノ	一三六

ナリ近年ラデオアクチビテートニ關スル研究ノ進歩ニ伴ヒ是等鑛泉中ニハ放射能作泉ニ屬スルモノ多キヲ發見シタリ。

ラデオム放射能作泉ニ屬スルモノノ數ハ

冷泉 (三マツ以上ノモノ)	一一一
溫泉 (" ")	一四一

ナリ

本邦内地各地ニ於ケル著名ナル溫泉ヲ種類別トナストキハ凡ソ別表ノ如シ。

(四) 鑛泉ノ利用

- (1) 最も多ク利用セラル、ハ療養ノ用ニ供セラル、モノニシテ其ノ方法ニ沐浴等數種アリ。
- a. 沐浴 最も普通ニ行ハル、方法ニシテ療養セントスルモノハ各自好ム所ノ鑛泉地ニ赴キ長ク滞在シテ一日數回鑛泉ニ浴ス所謂溫泉場ト稱スルモノハ總テ此ノ種ノ客ヲ迎フル設備ヲ有スル場所ニシテ溫泉

泉場ニ屬スル浴場ニ二種アリ一ツハ公衆浴場ニシテ多クハ泉源ニ近キ場所時トシテハ公衆ニ便利ナル場所ニ引湯シテ公衆ヲシテ自由ニ浴湯セシム此公衆浴場ニ付特筆スヘキコトハ歐米ノ公衆浴場カ入湯料ヲ徴スルニ反シ本邦ニ於ケル公衆浴場ハ多クハ無料ニシテ浴場ニ關スル經費ハ其部落民ノ共同負擔ナル點ニ在リ。

他ハ内湯ト稱シ旅館又ハ料理店等ニ於テ其ノ客ノ爲メニ設ケタルモノニシテ鑛泉地ニ於ケル此種ノ營業者ノ大部分ハ内湯ヲ有ス。

b. 蒸汽浴 別府、四萬、中房、鳴子等ノ如ク溫泉ト共ニ噴出スル自然ノ水蒸氣ヲ一定ノ室内ニ充滿セシメ此ノ中ニ入りテ蒸風呂ト稱シ蒸氣浴ヲナス設備アル所アリ。

c. 湯瀧 本邦特有ノ方法ニシテ人工ヲ以テ瀑布ヲ作り溫泉落下ノ形式水量高サ温度ヲ種々ニ作り沐浴者ハ其希望スル瀑布ニ頭部肩部等ヲ打タセ沐浴ニヨル効果ト同時ニマツサージ的效果ヲモ併セ取得スル様作りシモノニシテ此等ノ設備アル場所ハ登別、別府、霧島、鹽原、草津其他頗ル多シ。

d. 鑛泉ノ飲用 古代ヨリ長キ經驗ニヨリ一般ニ療養ニ効果アルモノトシテ飲用スル習慣アル鑛泉頗ル多シ。

砂湯 別府、指宿等ニ於ケルカ如ク海岸ニ溫泉ノ湧出スル溫泉地ニアリテハ砂湯ト稱シ溫泉ニテ温マレル砂中ニ身體ヲ埋メテ砂浴ヲ行フ設備アリ。

f. 湯花 鑛泉ニ含有セラルル物質ヲ採取シテ人工的ニ鑛泉ヲ再製シ家庭用ニ使用スル習慣アリ此採取シタルモノヲ湯ノ花ト稱シ二種アリ一ツハ草津伊香保ニ於ケルカ如ク自然ニ鑛泉ノ流域ニ沈澱シタル物質ニシテ多クハ硫酸酸化鐵等ナリ他ハ別府磯部ニ於ケルカ如ク濃厚ナル鑛泉ヨリ採取セルモノニシテアルカリ―鹽類ヲ主ナルモノトス。

一般ニ本邦ノ鑛泉ハ山間又ハ海岸ニ近接シテ多ク且ツ本邦人ハ沐浴ヲ好ムカ故ニ特殊ノ病者病後ノ回復期ニアル者虛弱ナル者休暇ヲ得テ保養スル者等ハ好シテ温泉地ニ赴キ滞在スル風習アリ大正九年（一九二〇年）ニ至ル十ケ年間ノ一ケ年平均鑛泉浴客延人員數ハ男九、四七三、八二二人女七、二六五、二〇六人計一六、八〇六、九一一人ヲ數フ。

(2) 療養以外ノ利用方法

a. 染物 別府、有馬、伊香保ノ如キ鐵分ヲ含ム鑛泉湧出スル場所ニ於テハ鑛泉ヲ利用シテ布類ヲ染メテ販賣セリ。

b. 土ノ山、指宿等ニ於ケルカ如ク蔬菜類ノ栽培ニ利用セラレ又ハ別府ニ於ケルカ如ク鶏ノ人工孵化ニ利用セララル、モノアリ。

c. 別府、湯村等ニアリテハ厨房用ニ使用セラレ日常ノ米野菜類ノ煮沸ヲ鑛泉ニ依ル部落アリ殊ニ湯村ニアリテハ一村落中他ノ燃料ヲ使用スルモノハ數戸ニ過キスト云フ。

d. 飲用ニ供スルモノ有馬、寶塚、布引等ニ出ツル鑛泉ハ食卓用鑛泉トシテ各所ニ販賣セララル。

(五)鑛泉ノ取締 以上略説スルカ如ク本邦ニ於テハ鑛泉ノ湧出地其數甚タ多キモ近時鑛泉濫掘ノ弊漸ク多ク從來湧出セル泉源ヲ壞滅シ若シクハ湧出量ヲ著シク減少セシムル者等出テシヲ以テ其弊甚シキ地方ニアリテハ地方廳令ヲ以テ取締ヲナス其内容ノ主ナルモノハ鑛泉地域ヲ設定シ該地域内ニ於テ土地ノ掘鑿等既存鑛泉ニ影響ノ虞アル作業ヲ爲サントスル者ハ地方長官ノ認可ヲ受ケシムルコトトシ以テ既存鑛泉ノ保護ニ努メツ、アリ。

浴湯ヲ經營スルモノニ付テハ土地ノ狀況ニ應シ各地方長官ハ特ニ鑛泉場取締規則ヲ公布スルカ又ハ一般浴場取締規則ニヨリ浴槽其他附屬設備ニツキ清潔保持及公安維持ニ關シ一定ノ規矩ニ依ラシメ且ツ其所屬ノ技術官及警察官ヲシテ時々臨檢セシメ取締ヲ勵行シツ、アリ。

鑛泉種類別表

單 純 泉

北海道 登別(温) カル、ス温泉(温)

神奈川 湯本(温) 塔ノ澤(温)

兵庫 湯村(温) 苦樂園(冷)

新湯 瀧泉屈(温) 村松(冷) 小出町冷鑛泉(冷)
 群馬 藤岡(冷)
 千葉 青堀(冷) 木更津(冷)
 三重 菰野(冷) 大師ノ湯(冷)
 静岡 伊東(温) 長岡(温) 古奈(温) 梅ヶ島(温)
 山梨 下部(温) 第二芳ノ湯(冷) 古湯(冷)
 岐阜 水昌温泉
 長野 別所(温) 沓掛(温) 上諏訪(温) 下諏訪(温) 淺間(温) 上山田(温) 戸倉(温) 安代(温)
 玩月湯 北ノ城
 宮城 田中(温) 小原(温) 赤湯(温) 川渡(温)
 福島 湯野(温) 飯坂(温) 谷津ヶ作(冷) 母畑(冷) 玉山(冷) 桑折(冷) 土湯(温)
 岩手 台(温)
 栃木 那須(温)
 山形 五色(温) 津山(温)
 秋田 湯ノ原(温) 松下(冷) 柳ノ湯(冷) 養老泉(冷)

石川 津幡
 富山 合田(冷) 北山(冷) 二上鑛泉 硫黄鑛泉 城端ラヂウム鑛泉
 鳥取 吉岡(温) 三朝(温)
 島根 有福(温)
 岡山 奥津(温) 湯原(温)
 山口 湯田(温) 船場(冷) 持世寺(冷) 保壽(冷)
 愛媛 道後(温)
 福岡 椿(温)
 大分 別府(温) 由布院(温) 湯ノ平(温)
 佐賀 武雄(温) 古湯(温)
 熊本 日奈久(温) 鯉ノ湯(温) 湯ノ浦(温) 平山(温) 御手洗(温) 立願寺(温) 有明(温) 山鹿(温)
 宮崎 雷(温) 龜澤(温)
 鹿兒島 伊作(温) 湯川内(温) 湯田(温) 砂石(温) 霧島温泉(温) 鰻(温) 日當山(温) 籠原ノ湯

炭 酸 泉

宮城 鬼首(温)
 富山 立山(温)
 兵庫 有馬(冷)
 長崎 小濱(冷)
 熊本 栃木(温)
 大分 別府(温) 龜川(温) 鐵輪(温) 湯ノ原(温)
 アルカリ性炭酸泉
 兵庫 湯村(温) 湊山
 新潟 高坪
 山梨 鹽山(冷)
 長野 星野
 石川 俱利加羅 鹿島路村アルカリ泉
 岡山 眞賀(温)
 佐賀 嬉野(温)
 宮崎 吉田鹿ノ湯(温)

アルカリ泉

長野 白骨(温)(土)
 栃木 鹽原(温)(土) 鹽原(温)
 宮城 鬼首(温)
 山形 五色(温)
 山口 深川(温)
 宮崎 大王(温)
 新潟 妙高(温)(苦) 不動湯(苦)
 和歌山 湯崎(温)(食)
 炭酸鐵泉
 兵庫 有馬(温)鹽、土、食) 平野(冷炭、食、ア) 天王(ア)
 新潟 松ヶ崎濱
 長野 片丘鐵礦泉
 山形 萬太郎湯(冷)
 石川 倉見(ア)



福井 ラヂウム鑛泉

富山 魚津ラヂウム

大分 別府(温) 観海寺(温)

食 鹽 泉

北海道 定山溪(温) 登別(温) 湯ノ川(温)(土) 根崎(冷)(土)

東京 森ヶ崎(冷)(土)

神奈川 宮之下(温) 湯ヶ原(温)

新潟 高瀬(温)(苦)

群馬 四万(温) 四万(温)(苦) 磯部(冷)(炭、ア) 梨木

静岡 修善寺(温) 伊東(温) 熱海(温)(土)

栃木 鹽原(温)

山梨 湯村(温) 瀧温泉(冷) 増富(冷)

宮城 鎌先(温) 鬼首(温)

福島 場本(冷) 熱鹽(温)(土)

岩手 台(温)

青森 食(温)

兵庫 有馬(温) 城崎(温)(土) 寶塚(冷)(炭)

山形 銀山(温) 瀬見(温) 湯ノ濱(温)(土) 東根(温) 小野川(温)(土) 赤湯(温)(土) 温海(冷)

(土)

秋田 鷹ノ湯(温)

石川 片山津(温) 和倉(温)(鹽土) 深谷(冷)

富山 小川(温)(ア) 山田(温) 八幡

福井 蘆原(温)(鹽土)

大阪 錦溪(土)

長野 澁(温)(苦)

鳥取 三朝(温)

島根 玉造(温) 志學(温) 志學(冷)

岡山 鷺温泉(温)(鹽)(土)

山口 川棚(温)

大分 別府(温) 別府(温)(炭) 龜川(温) 湯ノ平(温)

鹿兒島 指宿(温) 舞鶴
宮崎 青島(冷)

苦味泉

群馬 伊香保(温)(石)
栃木 鹽原(温)(芒)

静岡 土肥(温)(石) 伊豆山(温)(石) 古奈(温)

長野 上諏訪(温)(芒) 下諏訪(温)(芒) 湯田中(温)(石、鹽、土)

青森 酸ヶ湯(温)(石)

宮城 鳴子(温)(芒) 遠刈田(温)(石、芒)

福島 東山(温)

山形 上ノ山(温) 肘折(温)(芒) 湯田川(温)(石)

石川 辰ノ口(冷)(芒)

鳥取 吉方(温)(土)

熊本 栃木(温)(石)

酸性泉

長崎 温泉(温)

岩手 台(温)

青森 酸ヶ湯(温)

山形 高湯(温)

福島 嶽(温)

栃木 那須(温)(硫)

酸性綠礬泉

北海道 登別(温)

長崎 温泉(温)(硫)

群馬 草津(温)

栃木 那須(温)(硫)

宮城 鬼首(温)

大分 鐵輪(温)

酸性明礬綠礬泉

兵庫 田ノ代

群馬 草津(温) 草津(温)(硫)

長野 温湯(硫)

大分 明礬(温) 由布院(温)

明礬 泉

福島 高湯(温)(硫)

綠礬 泉

愛媛 御幣

硫 黄 泉

北海道 登別(温)

芦ノ湯(温)

栃木 那須(温) 那須(温)(硫水) 日光湯本(温)(硫水) 日光湯本(冷)(硫水) 那須(冷)(硫水)

長野 別所(温) 田澤(温) 山田(温)(苦) 野澤(温) 蒸ノ湯

宮城 鳴子(温) 川渡(温) 鬼首(温)

山形 湯ノ濱(温)

石川 山代(温)(苦) 山中(温)(苦) 粟津(温) 湯ノ森

富山 愛本(温)

和歌山 椿(冷)

鳥取 吉岡(温) 三朝(温) 關金(温)

香川 鹽江鑛泉(冷)

福岡 武藏(温)

長崎 温泉(温)(硫水)

熊本 枳木(温)

大分 鐵輪(温) 明礬(温)

鹿兒島 伊作(温) 湯ノ元(温) 山川鹽湯(食) 川井田(硫水) 川畑鑛泉新湯(硫水)

未詳ノモノ

山梨 白鬚(冷) 神明(冷) 笛陽館(冷)

岐阜 喜多ノ湯(冷) 柳ノ湯(冷)

長野 岩手 御馬寄 宮本 小諸 落合 加賀井 鑛泉和泉湯 鹿教湯(温) 靈泉寺(温)

富山 鯉 新湊荒屋 吹上鑛泉

島根 鷺ノ湯(温)

鹿兒島 尻無湯 湯牟田ノ湯 太田湯 麥生田湯 鑛泉 東郷 岩崎 竹追 串良 鐵湯 須彌山湯

放射能作溫泉(一リットル中五マツヘ以上)所在地

北海道 湯ノ川(土類含有食鹽泉) 根崎(土類含有食鹽泉)

兵庫 城崎(鹽化土類含有食鹽泉)

新潟 枋尾又(單純泉)

枋木 鹽原(福渡戸食鹽泉)

宮城 遠刈田(石膏及芒硝性苦味泉)

青森 大鰐(食鹽泉)

石川 和倉(鹽化土類含有食鹽泉)

山形 小野川(鹽化土類含有食鹽泉)

鳥取 三朝(食鹽泉、單純泉、硫黃泉) 關金(硫黃泉) 勝見(鹽化土類含有芒硝性苦味泉) 濱村(鹽化土類含有芒硝性苦味泉) 東郷(單純泉)

島根 玉造(食鹽泉)

山口 川棚(鹽類泉)

鹿兒島 阿久根(舞鶴、食鹽泉)

放射能作冷泉(一リットル中五マツヘ以上)所在地

兵庫 有馬(鹽化土類及食鹽泉有碳酸鐵泉) 武田尾(鹽化土類含有硫黃泉) 西野(單純泉) 苦樂園(越

木岩新田、單純泉)

新潟 枋尾又(單純泉) 村杉(單純泉) 今板(單純泉) 出湯(單純泉)

滋賀 雄琴(單純泉) 大野(單純泉)

三重 菰野(單純泉)

岐阜 高山(惠那、單純泉) 蛭川(單純泉)

山梨 増富(土類含有食鹽泉、食鹽泉)

長野 大桑(碳酸泉)

鳥取 松崎(鹽類泉) 吉方(金加)

島根 粕淵(碳酸泉) 宍道(單純泉) 池田(野畑新湯、碳酸泉) 頓原(神休、碳酸泉)

岡山 栢谷(苦田、單純泉)

愛媛 道後(新湯、單純泉)

福島 母畑(硫黃泉) 猫啼(單純泉) 東山(芒硝性苦味泉)

備考

鑛泉名下ノ括弧内ノ文字中
 温ハ攝氏三十度以上冷ハ三十度以下ノ鑛泉ナルコトヲ示ス
 土或ハ炭ハ土類含有或ハ炭酸含有ノ略
 鹽土ハ鹽化土類、食ハ食鹽、硫ハ硫化水素含有ノ略
 アハアルカリ性、苦ハ苦味性ノ略
 硫水ハ硫化水素泉ノ略
 苦味泉中石ハ石膏性、芒ハ芒硝性ノ略

母性及小兒保健

(Maternity and child Welfare)

内務技師 氏原佐藏

(一) 生産及死産

最近ノ統計カ示ス大正十一年(一九二二年)ノ事實ニ徴スレハ、内地ニ於ケル出生ハ一、九六九、三一四ニシテ人口千ニ付三四・一六ノ割合ニ當リ、又同年ニ於ケル死産ハ一三二、二四四ニシテ人口千人ニ付二・二九人口五萬以上ノ都市ニ於ケル率モ二・二九ヲ示ス、今參考マテニ一九〇三年明治三十六年以降ノ生産及死産ノ狀況ヲ示セハ左ノ如シ。

年	生		産		死		産	
	實	數	人口千ニ付	實	數	人口千ニ付		
一九〇三年	一、四八九	八一六	三二・九六	一五三、九二〇	三・三〇			
一九〇八年	一、六二二	八一五	三三・七二	一六二、六七六	三・三〇			
一九一三年	一、七五七	四四一	三三・二一	一四七、七六九	二・七九			
一九一四年	一、八〇八	四〇二	三三・六九	一四五、六九二	二・七二			
一九一五年	一、七九九	三二六	三三・〇五	一四一、三〇一	二・六〇			

一九一六年	一、八〇四、八二二	三二二、六八	一三九、九九八	二、五三
一九一七年	一、八一二、四一三	三二二、三四	一四〇、三二八	二、五〇
一九一八年	一、七九一、九九二	三二二、一九	一四二、五〇七	二、五六
一九一九年	一、七七八、六八五	三一、六二	一三二、九三九	二、三六
一九二〇年	二、〇二五、五六四	三六、一九	一四四、〇三八	二、五七
一九二一年	一、九九〇、八七六	三五、〇五	一三八、三〇一	二、四四
一九二二年	一、九六九、三二四	三四、一六	一三二、二四四	二、二九

即チ上表ニ依リ觀レハ生産率及ヒ死産率共ニ逐年稍減少ノ傾向ニ在リト雖モ、尙ホ此ノ出生率ハ世界文化國中其ノ比ヲ見サル高率ニシテ、死産率ハ之ヲ最近ノ統計ニ付キ二三ノ邦國ニ較フレハ、歐洲諸國ハ人口千ニ付何レモ一以下ニテ例ヘハ一九二二年(大正十年)獨逸ハ〇・八、佛國ハ統計年報 Annuaire Statistique ノ速報ニヨリ計出スルニ一九二三年(大正十二年)ニハ〇・八 英國(イギリス)及ウエールスハ同年ニ於テハ〇・七(On the State of the Public Health, for the year 1923. ニ據リ計出ス)ナルニ比スレハ我國ハ著シク高率ナルカ如シ。而シテ吾國ノ死産率ヲ地方別ニ見レハ一九二二年(大正十一年)中最モ多キハ栃木ノ三・八一最少ハ沖繩ノ〇・〇一ニシテ其ノ差二・八〇ナリ、此ノ沖繩ノ特ニ低少ナルハ他府縣ノ届出非常ニ精密ナルニ比シ同縣ハ小離島散在ノ爲メ届出手續ノ困難等ノ影響ニヨリ届出數或ハ少キコトニ因スルニアラスヤトモ想像サル。

死産兒ノ身分關係一九二二年(大正十一年)ニ於ケル出生兒ノ身分關係ハ公生九二%、私生(庶子ヲ含ム)八%ナルカ、同年ニ於ケル死産兒ハ公生七七%、私生二三%ニシテ出生兒ニ於ケル公私生ノ關係ニ比シ私生兒ノ死産率約三倍ニ上レリ、今此ノ關係ヲ示セハ左表ノ如シ。

身分	實數		千分比	
	一九二二年	一九二一年	一九二二年	一九二一年
總數	一三三、二四四	一三八、三〇一	一、〇〇〇	一、〇〇〇
公生	一〇二、二一〇	一〇六、二八五	七七二・五	七六八・五
私生	三〇、〇三三	三二、〇一〇	二二七・五	二三一・五
身分不詳	三	六	〇・〇	〇・〇

死産兒懷孕月數別 之ヲ一九二二年(大正十一年)ノ事實ニ基キ死産ヲ受胎後分娩ニ至ル迄ノ月齡別ニ觀察スレハ十箇月三八%、九箇月一九%、八箇月一六%、七箇月一三%、六箇月以内各月ノ割合ハ之ヲ合シテ一五%ナリ。

(二) 妊娠及産ニ因スル死亡

妊娠及産ニ因スル死亡ハ素養アル産婆ノ普及トノ關係ヲ最近拾箇年間ノ統計ニ付キ示セハ左ノ如シ。

年次	妊娠及産ニ因スル死亡		産婆普及ノ狀況	
	實數	死亡千ニ付	實數	人口一萬ニ付
一九一三年	五、九〇〇	一一・六	三〇、〇三四	五・七三
一九一四年	六、四一八	一三・二	三一、〇四八	五・七九
一九一五年	六、四五二	一二・五	三一、八五四	五・八五
一九一六年	六、三三七	一二・一	三二、八四〇	五・九五
一九一七年	六、三六八	一〇・八	三四、二九五	六・一二
一九一八年	六、八一二	九・二	三四、三四八	六・〇四
一九一九年	五、九一〇	九・三	三五、二三五	六・二六
一九二〇年	七、一五八	一〇・二	三六、〇五五	六・四四
一九二一年	七、一八一	一一・四	三六、六五七	六・四六
一九二二年	*六、五六五	一〇・四	*三七、七一四	六・七〇
拾箇年平均	六、五一〇	一一・六	三四、〇〇九	六・一三

(備考) *一九二二年産婆統計中ニハ神奈川縣ヲ含マス。

即チ上表ニヨツテ見レハ妊娠及産ニ因スル死亡ハ最近拾年間ニ於テ殆ント變化ナケレトモ別ニ増加ノ傾向ヲモ認メス、又産婆ハ逐年素養アルモノノ數ヲ増シ且ツ實數及人口比例ニ於テモ遞増ノ傾向ニ在リ。

(三) 乳・幼兒死亡

一歳未満ノ小兒死亡者ヲ當該年ニ於ケル出生者ニ對比セル所謂乳兒死亡率 Infant mortality ヲ一八七六年(明治十九年)以降毎五箇年間平均ニ付觀察スレハ左ノ如シ。

生産百ニ付一歳未満者ノ死亡

- 一八八六——一八九〇年……………一一・七
- 一八九一——一八九五年……………一四・七
- 一八九六——一九〇〇年……………一五・三
- 一九〇一——一九〇五年……………一五・四
- 一九〇六——一九一〇年……………一五・七
- 一九一一——一九一五年……………一五・六
- 一九一六——一九二〇年……………一七・四
- 一九二一年……………一六・八
- 一九二二年……………一六・六

即チ以上統計ノ示ス如ク過去三十七年間寧ロ増進ノ狀況ニ在リ。之レ我國ノ生産力未タ著シキ減退ヲ示ササルト共ニ注目スヘキ現象タリ。最近十箇年間ニ於ケル生産率ト乳兒(一歳未満)死亡率トノ比較ヲ試ムレハ次ノ如シ。

人口千ニ付生産 生産百ニ付乳兒死亡

一九一三年	三三三・二	一五・二
一九一四年	三三三・七	一五・九
一九一五年	三三三・一	一六・〇
一九一六年	三三二・七	一七・〇
一九一七年	三二二・六	一七・三
一九一八年	三二二・二	一八・九
一九一九年	三二一・六	一七・一
一九二〇年	三二六・二	一六・六
一九二一年	三五・一	一六・八
一九二二年	三四・二	一六・六

出生率ニ於テ一九二〇年(大正九年)以降俄カニ高率ヲ示セリ之ハ其ノ原因何レニアリヤヲ明言シ難キモ恐クハ歐洲大戰中ヨリ以後ニ亘ル一時ノ好景氣ノ爲メ結婚實數ノ増加セルコト及ヒ國勢調査ニヨル基本人口ノ移動等ハ相當ノ影響アリシモノト推測セラル。何レニセヨ出生率ハ未タ減少セス。又乳兒死亡率ハ一九一八年(大正七年)カ特ニ高キハ「インフルエンザ」大流行ノ餘波ヲ蒙リシ爲ナレト、之ヲ除外スルモ尙乳兒死亡率

著ルシキ變化ナシ而シテ最近歐洲各國ニ於ケル最低乳兒死亡率カ七・〇内外ナルニ比スレハ其ノ倍數以上ヲ占ム。

更ニ乳・幼兒死亡ト一般總死亡トハ如何ナル關係ニ在リヤヲ示セハ左ノ如シ。

年	〇—五 歲	再掲 〇—一 歲	五 歲 以 上	年 齡 不 詳	合 計
一九一三年	四〇四、六三六	二六七、二八一	六二二、五七八	四三	一、〇二七、二五七
一九一四年	四六三、二四二	二八六、六七八	六六五、四九三	八〇	一、一〇一、八一五
一九一五年	四三六、五五二	二八八、六三四	六五七、一五五	八六	一、〇九三、七九三
一九一六年	四六四、一八六	三〇七、二八三	七二三、五四九	九七	一、一八七、八三二
一九一七年	四六八、二九二	三二三、八七二	七三一、二九〇	八三	一、一九九、六六九
一九一八年	五三一、八三五	三三七、九一九	九六一、二五七	七〇	一、四九三、一六二
一九一九年	四七四、四五二	三〇三、二〇二	八〇七、四一二	一〇一	一、二八一、九六五
一九二〇年	五一七、八二二	三三五、六一三	九〇四、二二三	五一	一、四二二、〇九六
一九二一年	五〇四、〇五四	三三五、一四三	七八四、四七一	四五	一、二八八、五七〇
一九二二年	四九二、〇六〇	三二七、六〇四	七九四、八五四	二七	一、二八六、九四一
平均	四七三、〇一三	三二〇、三二三	七六五、二二九	六八	一、二三八、三一〇

即チ五歲未滿ノ乳・幼兒死亡者數ハ上掲十箇年平均ニ於テ四七三、〇一三名、就中同上中一歲未滿ノ小兒死亡數平均ハ三一〇、三二三ニ上ル、是等ノ關係ヲ總死亡ニ對スル百分率ヲ以テ示セハ左ノ如シ。